

小学校におけるワークショップ型校内授業研究会の改善過程

The process of improvement of the workshop type In-house lesson study in elementary school

生 田 淳 一

Junichi IKUTA

(福岡教育大学教育心理学講座)

(平成25年9月30日受理)

要 約

本研究の目的は、小学校におけるワークショップ型授業研究会の取り組みについて報告することである。特に、ワークショップの進め方やその改善過程について具体的に報告する。研究会を効果的に活用するためには、研究会の進め方やワークショップの枠組みなどをニーズに合った形で修正することが必要であり、本研究の場合、グループワークの進め方や模造紙での整理の視点、ワークショップの枠組みの変更が効果的であったといえる。ワークショップ型授業研究会は、活用する学校の実態に応じて修正することで、利用可能性が高まると考えられる。

キーワード：ワークショップ型授業研究会, 授業改善, 教師としての力量

1 問題

教師による自律的な授業研究が「レッスンスタディ」という言葉でアメリカをはじめとする海外に1990年代後半に紹介され、2000年以降国際的にも20か国以上の国の教師たちが、授業研究に取り組むように急速に展開してきている(秋田, 2008)。このような授業研究は、日本の学校文化として根付いており、教師としての力量向上に一定の機能を果たしてきたと考えられる。

しかし、日本の授業研究は、多元的であり、重層的であり、多様である。つまり、「レッスンスタディ」と概括されるような単純な様式ではなく、形式主義的な理解にとどめるべきではない(佐藤, 2008)。この日本に根付いた教師としての力量向上において重要な役割をもつ取り組みは、さらに進化・発展することが可能であり、またそれを実現していくことが求められる。

授業研究のあり方は多様である。浦野(2009)は、校内授業研修会を『従来型』の教科等の学校訪問や要請訪問時の研修会の方式、『ワークショップ形式』の研修会の方式、『子どもの学び』に焦点化した研修会の方式の3つのタイプに分類している。この中で、より一般的なものが従来型で、指導主事等による計画訪問や要請訪問の場合、授業参加後にもたれる研究協議会(授業検討会)の形式はほぼ次のように定式化されている。①校長等のあいさつ、②授業者による振り返り、③質疑応答、④指導主事等からの指導助言、⑤校

長等からのあいさつの順に進行することが多い。この従来型では、授業者への質問と気付いたことの発言は一部の教員に偏ることが多く、ほとんどの教員は大多数の時間を聞き役として過ごすことが多い(浦野, 2009)。

ワークショップ型授業研究会は、このような研究会が形骸化し、その機能を失った際に活用されることが多く、教師力を高めていく方法として選択されることが多い(村川, 2005, 2010)。ワークショップとは、「講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学び合ったり創り出したりする学びと創造のスタイル」(中野, 2001)のことを指す。ワークショップ型の授業研究会の効果について、横浜市教育センター(2009)では、①協議会におけるコミュニケーションの活性、②人間関係・チーム力の向上、③教科を越えた授業研究、④異校種間での相互理解に効果があると指摘している。ワークショップ形式は、教員としての力量向上を促進するために導入するケースも増えているが、まだ一般的な方法として定着しているわけではない。今後、従来型の授業研究会と機能を分かちながら、ワークショップ形式の利用可能性を高めていくために、このような研究や実践が蓄積されていく必要がある。

ここでは、公立小学校におけるワークショップ形式を取り入れた授業研究会に注目し、その改善過程について報告する。

2 ワークショップ型授業研究会の取り組み

本稿において対象とする取り組みは、平成23年度より2年間継続して実施された取り組みである。この取り組みは、それぞれの授業の課題の明確化・共有化、さらには改善点の検討ができるようなワークショップ型授業研究会を通して、参加者ひとり一人が、日頃の授業改善につながるような気付きを得ることを目的として実施された。

2.1 授業参観の仕方について

本取り組みの当初の計画では、授業研究会参加者(=授業参観者)に対して、授業参観中に付箋に子どもの活動などを記録することを求めた。しかしながら、授業観察記録用紙への記入などの作業と重なることから、最終的には付箋への記入は、授業研究会のグループ協議の中に時間を確保し、その場で行うことができるよう変更を加えた。その際には、個人のメモや授業観察記録用紙などが利用された。

付箋に記入する際には、1つの付箋に1つの内容を記入するよう求めた。付箋に気づいたことを、それぞれ事実を中心に記述するよう求めた(例:○○さんが○○していた)。その際、解釈はできるだけ加えないことを周知した。付箋の記述は適切なものが多く、このルールは参加者に共有されていたと考えられる。

2.2 グループ協議の進め方について

付箋を整理しながら、子どもたちの姿を共有し、「授業のよさ」、「課題や改善点」などについて協議した。基本的な協議会の進め方は次の通りである。

- ・付箋を説明しながら模造紙に貼る。
- ・次の人は、前に貼った人との関連を見て、似ているものに接して貼るようにする。
- ・全員が終わったら、ペンで囲んでまとめ、見出しをつくる。
- ・模造紙をもとに、この授業をさらによくするために解決すべき課題を検討する。
- ・課題の解決策・改善策を検討する。
- ・各グループの話し合いの様子を各グループの代表が発表し、全体で共有する。

付箋は、研究会でのグループ協議で用いる情報の源となることから、その種類をどうするかは協議会の内容を左右する重要な検討課題の1つと考えられる。初期(1年目前半)は、「教師の活動(発問を中心に):赤色の付箋」、「子どもの活動:黄色の付箋」、「教材などの環境設定:青色の付箋」を挙げた。しかし、「教材などの環境設定」は、記述が難しかった事などを理由に、中期(1年目後半以降)から削除した。また、研究会の主な検討事項として考えていた「教師の発問」が浮き彫りにならないという課題が見つかったことから、「教師の発問」を青色の付箋で取り出した形で実

施した。「教師の活動」、「子どもの活動」、「教師の発問」という3つの枠組みは、時系列をもとに授業を整理するという形の協議会において使いやすい効果的な種類設定となった。

3 ワークショップ型授業研究会を活性化するための改善過程

3.1 グループ協議の進め方・ワークの様式の変化

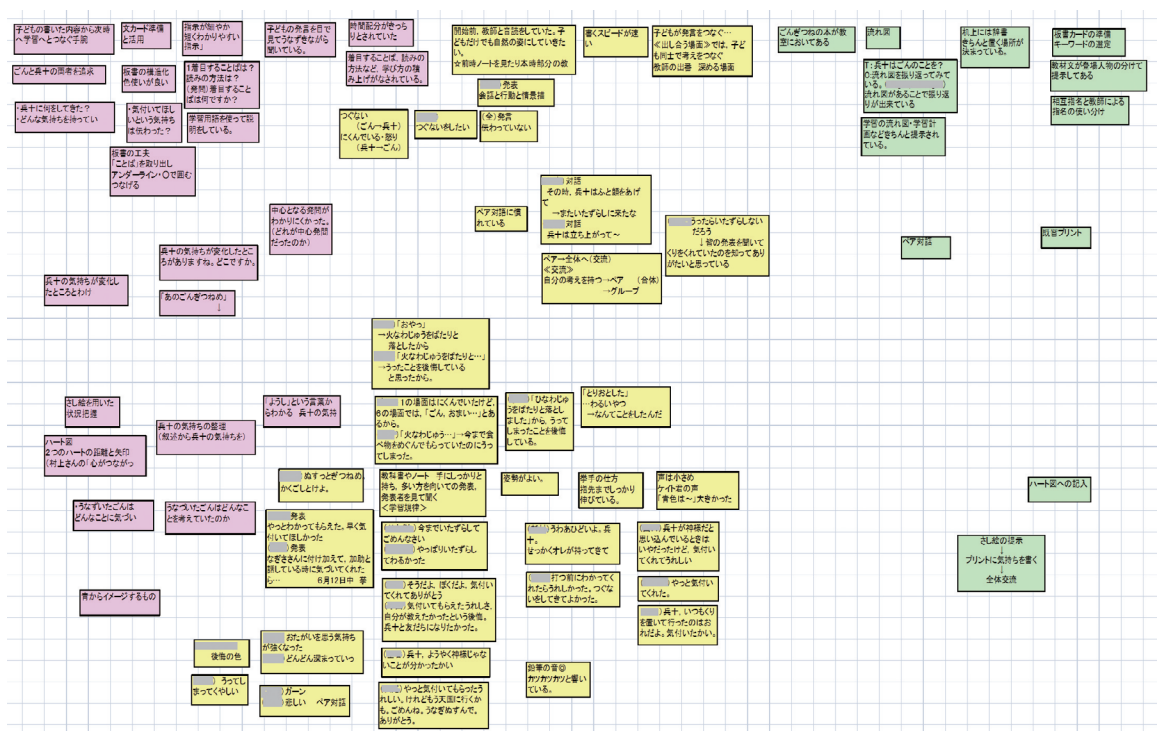
グループ協議の進め方については、参加者(教師)の提案などを参考に、グループ協議の進め方(ワーク様式など)を改善していった。参加者と進め方について検討しているときに、最も印象的だったのは、「授業の展開・時系列を意識したまとめ方がいい、その方がしっくりする」ということばである。例えば、初めてのグループ協議において、筆者や研修担当ら企画者が指示することなく、ファシリテーター役の教師は、躊躇なく参加者の付箋を時系列に沿ってまとめていったのは興味深かった。本取り組みの最終的なワークの様式は、参加者からの「横軸に時系列をいれる」という提案に基づいて作成されたものであるが、結果、効率よくグループ協議ができる形へと変化した(図1~図5)。

3.2 ワークショップの枠組みの変化

本取り組みの2年目は、前年度の反省をもとに改善した方法を用い、参加した教員の意見・提案をもとに、随時改善を行った。常に、参加者から問題点や、それに対する前向きな改善案が提案されたことで、より授業改善に貢献する研究会のあり方が確立されていったと考えられる。

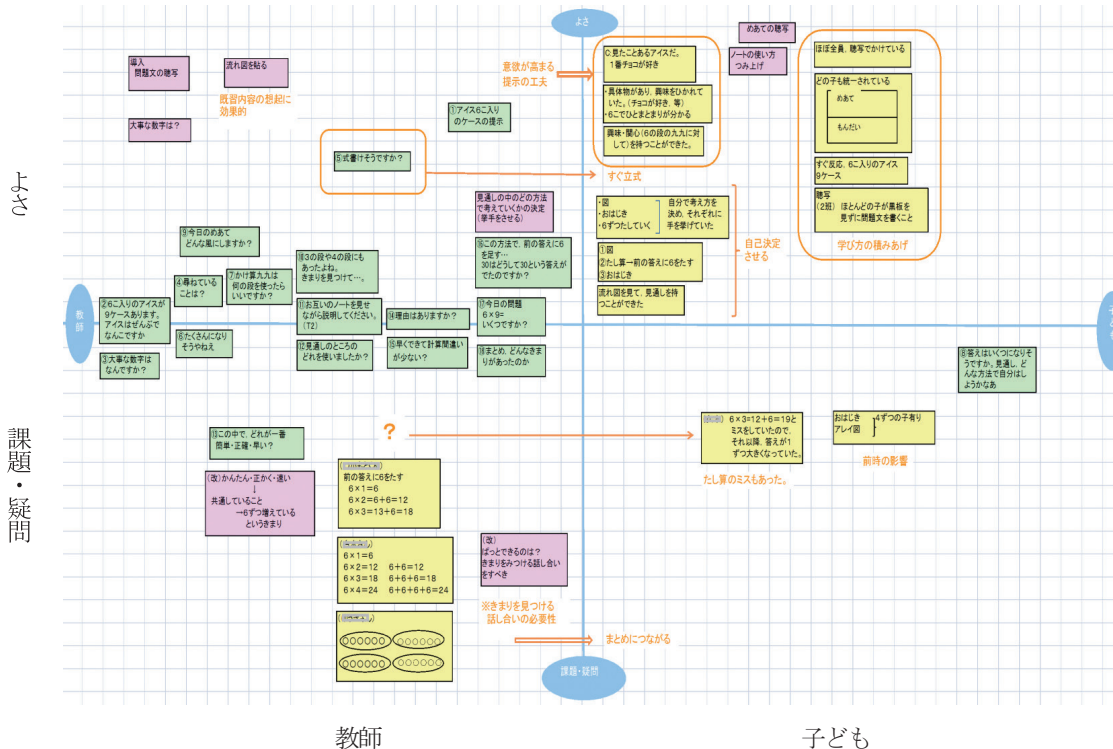
その中で、1年目の課題として明らかになったのは、「ワーク(模造紙に授業のよさや課題を整理すること)に終始し、改善案の提案ができていない」という点であった。このことを解消するために、2つの改善を行った。第1の改善は、ワークの位置づけの見直しである。これまでゴールとなっていたワーク(ポスターづくり)をプロセスと位置づけ、新しく「グループ発表シート」を作成し、「よさ」、「課題・疑問など」、「代案など」をグループごとに検討し発表することをワークショップのゴールと位置づけなおした。このことにより、これまでの研究会では課題の提示にとどまっていたが、代案(改善案)を中心に検討できるようになった。第2の改善は、授業者の研究会への参加のあり方の見直しである。2年目の前半までは、質疑および自評の際にしか、授業者は発言することがなかった。また、参加者もよさや課題を整理するワークの途中で発生した疑問を授業者にぶつけることができなかった。そこで、2年目後半からは、授業者もあらゆる場面でワークに参加するように変更した。この改善により、教師の発問や様々な手だての意図について、授業者に随時説明を求めることができ、課題や改善案の検討の際に役立

導入
↓
まとめ



※時系列の流れは、わかりやすいが、よさや課題の分析が難しい。

図1 初期（1年目前半）のワークショップにおける作品の典型例



※ よさや課題の分析は可能になったが、時系列の流れが抑えられない。また、付箋のカテゴリーと横軸の機能が重なっており整理しにくい。

図2 中期（1年目後半）のワークショップにおける作品の典型例

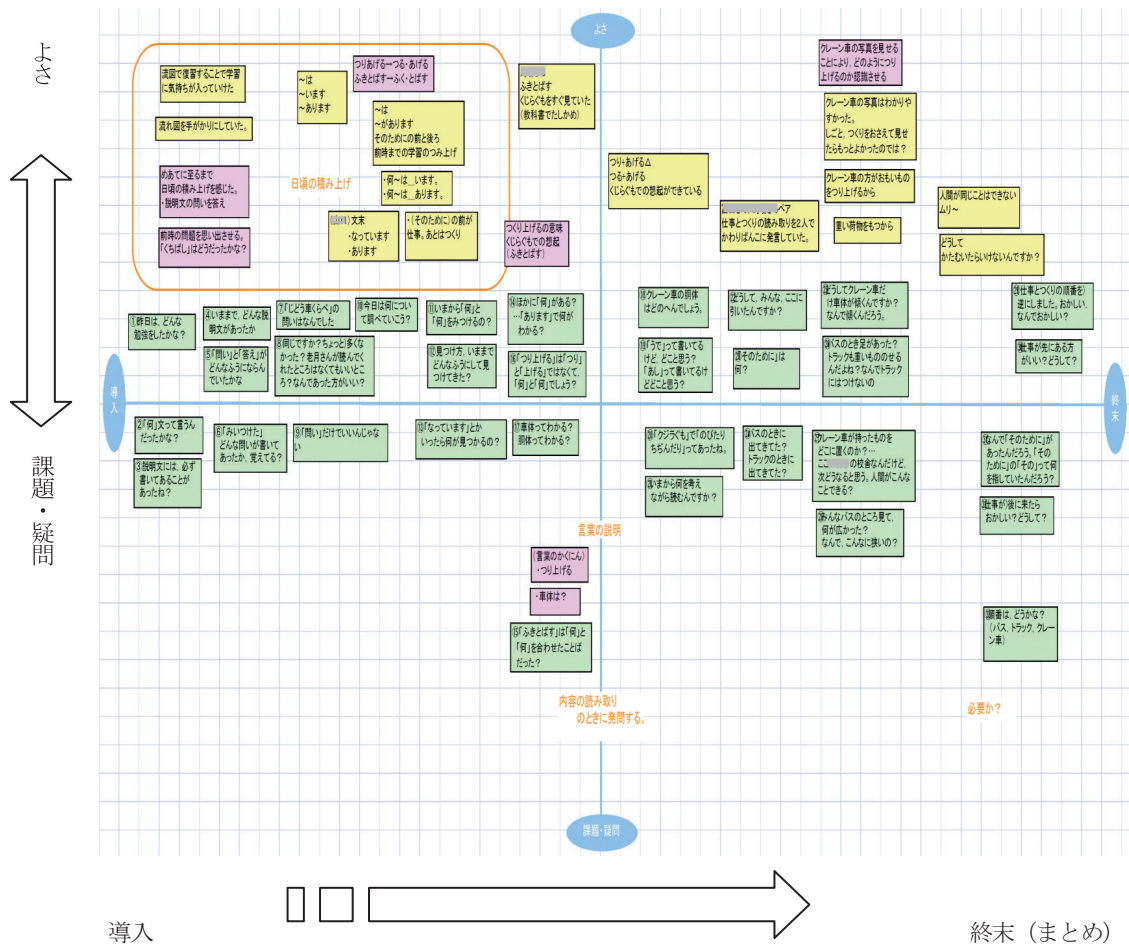


図3 後期(2年目以降)のワークショップにおける作品の典型例(1)

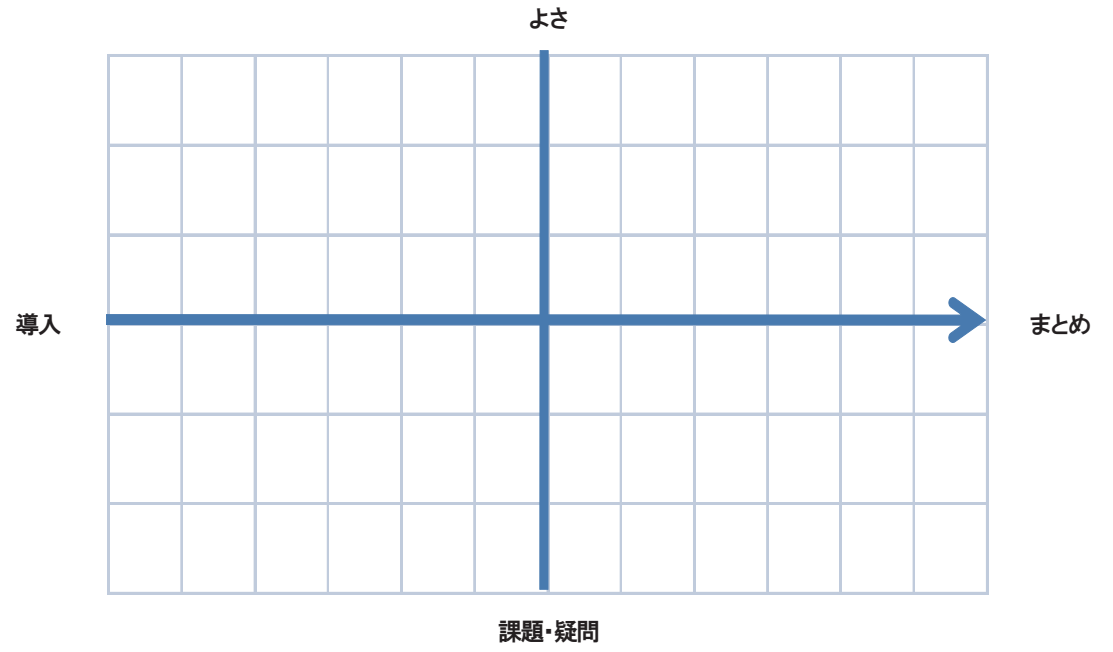


図4 最終的なワーク(模造紙に授業のよさや課題を整理すること)の様式

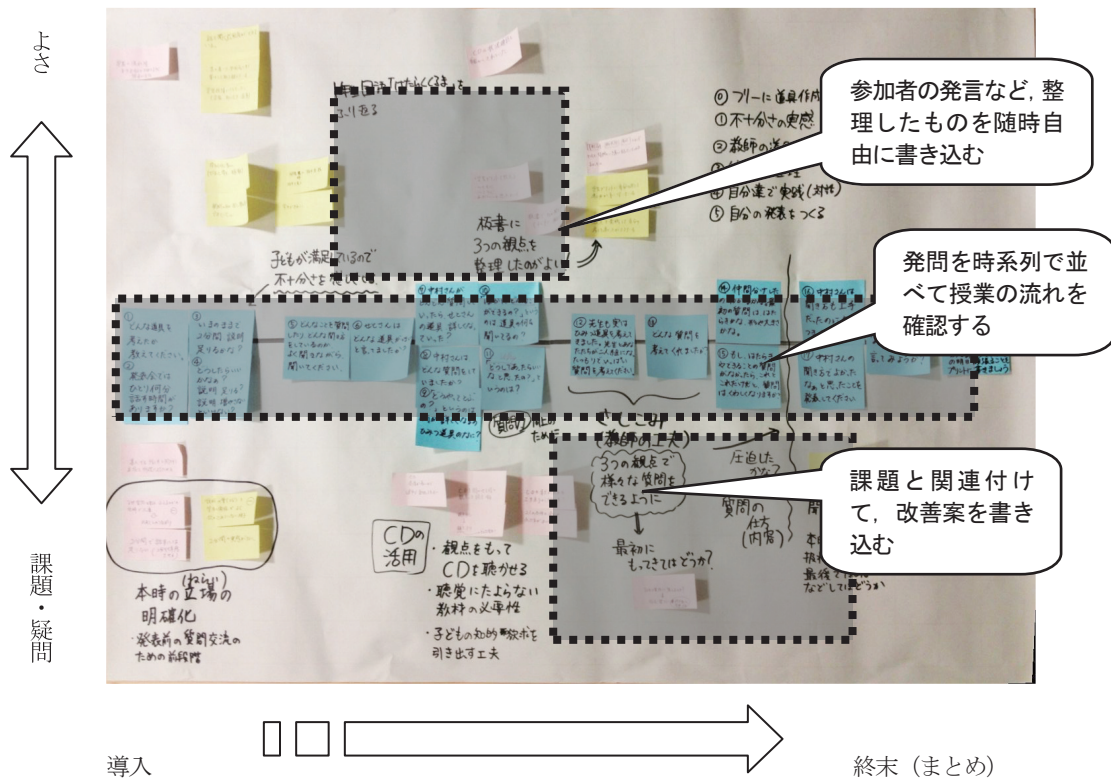


図5 後期（2年目以降）のワークショップにおける作品の典型例（2）

つ情報を適宜得ることが可能になった。一方、授業者は、参加者に直接アドバイスなどを求めることも可能になった。

3.3 改善後のワークショップ型授業研究会の進め方

このような改善過程を経て確立したワークショップ型授業研究会における協議会の基本的な進め方は、次の通りである。なお、2年目に改善された点について、下線を引いた。

- 1 付箋を準備する（教師の活動：ピンク，子どもの反応：黄，発問：青）。
- 2 発問の付箋を模造紙中央の横軸に時系列に並べ、授業の流れを確認する。
- 3 付箋を説明しながら模造紙に貼る（子どもや教師の活動を中心に，よさ・課題に整理する）。
- 4 次の人は，前に貼った人との関連を見て，似ているものに接して貼るようにする。
- 5 全員が終わったら，司会者が中心となりペンで囲んでまとめ，見出しをつくる。発言なども可能な限り整理して書き込む。授業者も参加する。
- 6 模造紙をもとに，この授業をさらによくするために解決すべき課題を検討する。
- 7 課題の解決策・改善策を検討し，グループ発表シートの「よさ」「課題・疑問など」「代案など」の3つの欄に記入する。

8 各グループの代表が，グループ発表シートの「よさ」「課題・疑問など」「代案など」の3つの欄に記入した内容を発表し，全体で共有する。

4 まとめ

筆者も協力者（指導助言者）として，ワークショップ型授業研究会に取り組んでみて，想定以上に活発な議論がなされたのが印象に残っている。一つの授業について，子どもたちのために，参加者全員，若手とベテランが垣根なく議論するのは何より楽しい。村川（2005）が指摘するようにワークショップでは成就感を生み出しやすい。そのため，研究会が形骸化し授業改善を活性化していないと感じている教員や，そのような認識の会員が多い組織において，ワークショップ形式の導入は魅力的な存在となりうる。ワークショップ型授業研究会は，教授方法を若手とベテランで共有することや，子どもの課題に気付き共有するという点において，利点があると考えられる。

しかしながら，ワークショップ型授業研究会が，これまでの従来型の一つのテーマをじっくりと掘り下げようとする授業研究会の機能のすべてを担っていくわけではない。千々布（2009）も指摘するように，特に効果があるのは，授業研究の検討会が活性化していない学校や，特に若手の教師においてであり，効果は限定的かもしれない。高い水準の授業研究を実施しており，一つの授業について学習指導案の検討を繰り返すよう

な文化が根付いている学校であれば、従来通りの質疑応答を中心にした対一の検討会が有効であるかもしれない。しかし、昨今の教師の多忙化等を勘案すると、後者のような学校は少なく、教師がエンパワーメントされるような研究会も必要であり、学校の中で、組織的、計画的に年間計画の中に、従来型とワークショップ型が効果的に配されて実施されることが求められる。

ワークショップ型授業研究会は、万能ではないということを確認し、実施するうえでは課題もあり、活用するには相応の工夫をしなければ効果が得られないことを前提にしてもなお、ワークショップ型授業研究会には、よさがあると考えられる。先に述べたように、ワークショップ型研究会の効果について、横浜市教育センター（2009）では、①協議会におけるコミュニケーションの活性、②人間関係・チーム力の向上、③教科を越えた授業研究、④異校種間での相互理解に効果があると指摘している。教育界では、常に新しい課題への対応が求められている。このようなとき、ワークショップ型研究会が効果を発揮する場面が多くなると考えられる。例えば、「基礎・基本を活用する力をどう育むか」という課題になると、③教科を越えた授業研究の中で、新しい手だてを考案していく必要もあるだろう。また、「小中連携、接続の問題をどう解消するか」という課題であれば、④異校種間での相互理解をし、さまざまな面で情報の共有を行ってつながりを深めていく必要がある。そして、現在、あらゆる課題について学校組織での対応が求められており、②人間関係・チーム力の向上は不可欠な要素となってきた。

授業研究会は、ゴールではなく、スタート地点である。授業研究会を通して実現する教師の力量向上が、次の授業改善につながらなくてはならない。今後は、ワークショップ型は是か否かという点だけでなく、どのようなときに、どのような場を通して、どのような教師の力量を向上させるのかという視点をもちながら、研究会もより効果的なものとなるように改善していくことが求められる。そのために、研究会や研修の実践事例を共有し、研究会や研修をより効果的にするための方法論を模索し続けることが必要がある。

謝辞：ワークショップ型校内授業研究会を継続的に実施する取り組みに挑戦いただき、あらゆる面でご協力いただきました公立小学校の教職員の方々に、記して感謝の意を表します。

5 文献

秋田喜代美, 授業の研究 教師の学習 レッスンスタディへのいざない, 2008, 明石書店
 村川雅弘編 ワークショップ型研修のすすめ, 2005, ぎょうせい

村川雅弘編 「ワークショップ型校内研修」で学校が変わる学校を変える, 2010, 教育開発研究所
 中野民夫 ワークショップ—新しい学びと創造の場— 2001, 岩波出版
 佐藤学 第3章 日本の授業研究の歴史的重層性について, 授業の研究 教師の学習 レッスンスタディへのいざない, 2008, 明石書店, 43-46
 千々布敏弥 研究に寄せて—横浜市教育センターの研究体制と本書の意義について, 授業力向上の鍵 ワークショップ方式で授業研究を活性化, 2009, 時事通信社, 148-155
 浦野弘 公立中学校における校内授業研修会の持ち方に関する意識調査 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 第31号, 2009, 143-150
 浦野弘 公立中学校におけるワークショップ型校内研修を核にした授業力向上の取り組み—学校改善プランに即した一年間の実践を通して— 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 第33号, 2011, 111-121
 横浜市教育センター 授業力向上の鍵 ワークショップ方式で授業研究を活性化, 2009, 時事通信社